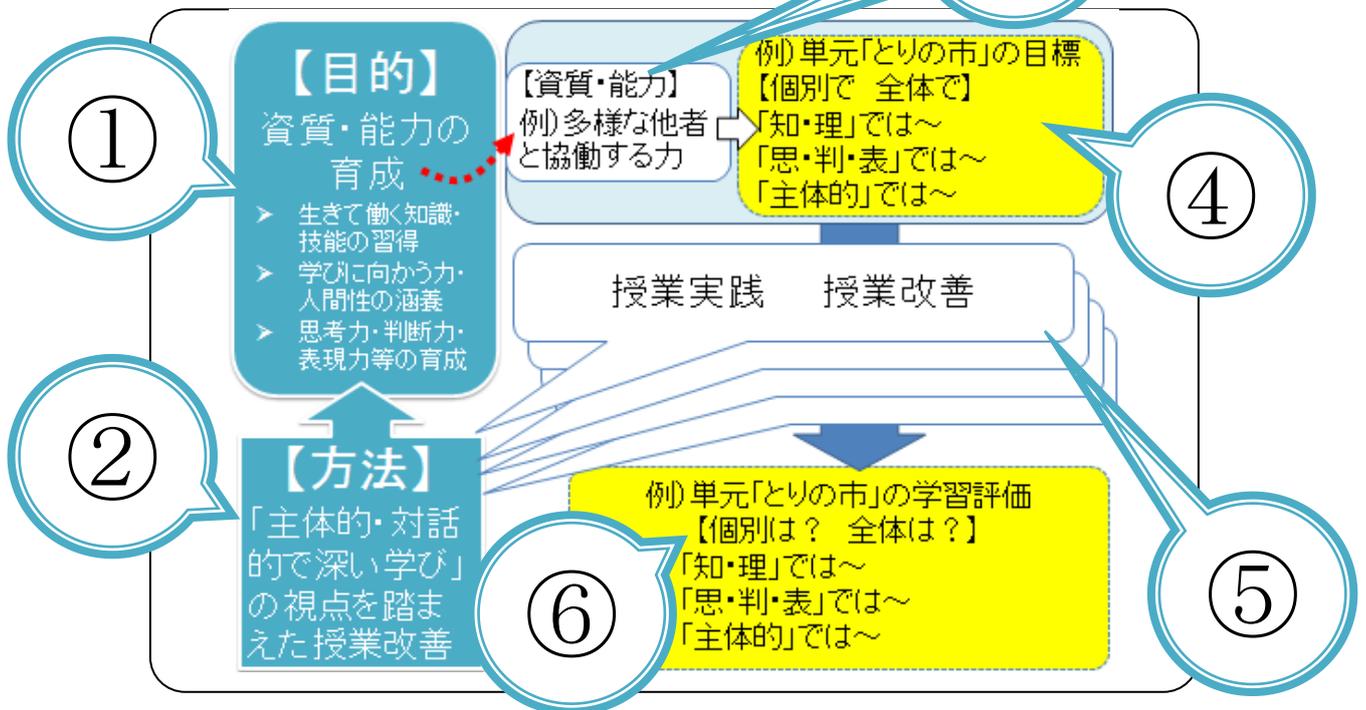


先日の職員会議で、日景先生から貴重な指摘をいただきました。



「主体的・対話的で深い学び」と、「観点別学習状況の評価（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体的に学習に取り組む態度）」とは、どのような関係にあるのでしょうか。

このことについて、図示・説明してみます。



まずは、授業づくり・改善の工程の中で、「主体的～」と「観点別～」が登場する「タイミング」や「目的」を見てみましょう。

本校では、教育目標「自立と社会参加」や「目指す子ども像（校訓）」である「健康・誠実・自立」、各学部の目標の達成を目指しています。これらを念頭に置きながら、授業づくりにおいては、「こんな力を育てていきたい」と考えるでしょう。それが「資質・能力」であり（①）、「主体的・対話的で深い学び」の実現は、それに至る「方法」と捉えられています（②）。

例えば、今、「多様な他者と協働する力」という「資質・能力」を育てたいと考えたとします（③）。単元や一コマの授業を考える際は「目標」を設定しますが、「資質・能力」のままでは、目標としてはぼんやりします。そこで、「協働」とは「誰とどんな活動をするのか」等を考えながら、具体的な「目標」を設定します。ここで、「観点別の学習状況の評価」の観点が登場します（④）。この観点があることで、バランスのとれた目標が立てられます。目標の達成を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業実践と改善をします（⑤）。授業後や単元後、子どもたちが「資質・能力」を身に付けたかを、「観点別の学習状況の評価」の観点から評価します（⑥）。